

アスリートにおけるグロインペインの文献的研究および症例研究 Systematic Review and Case Study of Chronic Groin Pain in Athletes

1K07A196-6

指導教員 主査 中村千秋先生

細川 由梨

副査 渡部賢一先生

【緒言】

グロインペインは下肢に負担の多いスポーツにしばしばみられるスポーツ傷害である。また、この傷害は長期に及んでアスリートに競技からの離脱を強いることから、その予防方法や管理方法は多くのスポーツ医療関係者の関心事である。

数多くの研究者が今日に至るまでグロインペインに関する研究を行ってきたが、その見解は増えるばかりで統一されることはなかった。これには単径部 (= グロイン) という言葉の定義の曖昧さや、この部位が解剖学的にも難解であることが少なからず影響している。

本研究の第一目的は過去 30 年間に発表されたグロインペインに関する研究について検討し、その病態や治療方法を明確にすることとした。次いで、大学女子ラクロス選手の症例を用いてグロインペインの病態を明らかにすることを第二の目的とした。

【方法】

1980 年から 2010 年の間に出版されたグロインペインに関する研究論文を文献的研究の対象とした。検索には SCOPUS (ELSEVIER 社) と PubMed を使用した。研究論文は全てスポーツ医学、画像医学、手術研究、解剖研究の英文ジャーナルから選択し、レビュー形式の研究論文は対象から除外した。また、本研究ではグロインペインをアスリートにおける筋骨格系の病変 (i.e. 筋損傷、腱炎、骨炎、骨膜炎) に限定した。

【結果】

全部で 29 の研究論文が本研究の対象となった。26 文献ではグロインペインに関係する骨と関節を明記しており、それぞれ恥骨結合 (73%)、恥骨 (62%)、骨盤 (8%)、仙腸関節 (8%)、股関節 (4%) の順に多かった。また、24 文献ではグロインペインに関係する筋腱を明記しており、それぞれ内転筋・腱群 (96%)、腹筋・腱群 (50%)、股関節屈筋群 (29%)、殿筋群 (13%)、その他 (13%)、股関節伸筋群 (4%) の順に多かった。グロインペイン研究の対象者のスポーツとして、サッカー (16) が最も多く報告されており、次いでオーストラリア式フットボール

(7)、ラグビー (6)、アメリカンフットボール (5)、ハンドボール (5) が多かった。また、実験対象者の性別を明記した 26 文献の全てがその対象に男性アスリートを選択しており、そのうち 10 文献では男女両方を対象としていた。

【症例研究】

恥骨疲労骨折と診断された大学女子ラクロス選手 1 名が症例研究の対象となった。診断にはレントゲンと MRI が用いられ、T2 強調画像で恥骨上枝に高信号を認めた。選手は物理療法と徒手療法を用いた保存療法で、7 週間のアスレティックリハビリテーションを行った。トレーニングメニューは医師およびアスレティックトレーナーによって管理された。保存療法により疲労骨折部は治癒し、その選手は傷害が発生した同シーズンの全リーグ戦に出場した。

【考察】

グロインペインの病態は、恥骨および恥骨に付着する筋の炎症であり、それらが 2 次的に周囲組織を侵すことで慢性化する。グロインペインの治療には、病変を引き起こした要因を特定することが必要不可欠である。治療は病変が不可逆的な場合でないかぎり、保存療法が選択されるべきである。保存療法では、患部の詳細な検査と受傷するまでに至った原因の早期究明が重要である。また、画像診断や手術によって明らかになった所見はアスレティックリハビリテーションに反映されるべきである。本研究で紹介した大学女子ラクロス選手の症例では恥骨疲労骨折が認められたが、漸進的なアスレティックリハビリテーションにより 7 週後に完全復帰することができた。

グロインペインが長期化する理由として、アライメント不良や体力不足などの選手個人に起因する内的要因が傷害発生の根底にある可能性があげられる。内的要因に性差があるかは更なる検討が必要であり、今後女性を対象とした研究が増えることを期待したい。アスリートにグロインペインのアスレティックリハビリテーションを立案する際は、傷害発生の引き金となった内的要因を改善するとともに、継続的に患部の経過を観察しその時々に応じた対応をすることが重要となる。